

女子学生における自己魅力意識と 対人態度との関連

—異性・同性・社会場面における比較—

伊藤 愛*・伊藤 裕子**

本研究の目的は、現代の若い女性の自己魅力意識の構造を明らかにし、女性に期待される役割の時代による変化を検討すること、そして、自己魅力意識が対人態度とどのように関連するかを明らかにすることであった。まず、女性の魅力を表す項目が収集され、自己魅力意識尺度が作成された。その上で、女子学生 264 名を対象に自己魅力意識の自己評価、同性／異性／社会一般への態度、恋人や恋愛経験の有無が尋ねられた。結果は以下のようにまとめられる。第 1 に、女子学生の自己魅力意識は、「外見」「社交性」「淑やかさ」「性的魅力」「自立・自律」の 5 側面から構成される。第 2 に、現代の女性には、女性役割、人間役割に加え、社会に貢献する一員としての男性役割も同様に期待されている。第 3 に、交際中の恋人の有無が女子学生の自己魅力意識のうち、「社交性」「性的魅力」の評価を異ならせる。第 4 に、同性への積極的な態度は「社交性」「性的魅力」によって規定され、異性への積極的な態度は「性的魅力」「自立・自律」によって規定される。以上から、若い女性において、現代における性的魅力の意味が論議された。

Key Words：自己魅力意識，自己評価，対人態度，女子学生

問題と目的

近年、女性の自己評価を規定する要因の変化が指摘されている。例えば、性役割観(柴山・新井，

*株式会社 アドヴァンスト・インフォメーション・デザイン

**人間学部心理学科

2004)では、「夫は外で働き妻は家庭を守る」という考え方に反対する女性の上昇(内閣府男女共同参画局, 2008), 女性の未婚化の進行(総務省, 2000)が報告され, 女性の就労に対する意識の変化やそれに伴う性役割観の変化がうかがえる。向井(2007)も, 伊藤(1978)のM-H-Fscaleを用いて現在と過去の性役割認知を比較し, 変化していることを示している。他方, 外見(馬場・菅原, 2000; 山本・松井・山成, 1982; 他)では, 瘦身の価値を重視するようになり(伊藤, 2006), 性行動は低年齢化, 活発化していることが報告されている(日本性教育協会行動調査, 2005)。このような女性自身と女性を取り巻く状況の変化を踏まえると, 現代女性の自己評価を規定する要因を改めてとらえなおしてみる必要があるだろう。

では, 女性における自己を規定する要因とはどのような側面から構成されるのであろうか。これまでの研究から, 「優しさ」「容貌」「家の経済力」「生き方」(山本ら, 1982), 「女性性役割観」「社会性」「性的魅力」「情緒安定性」(菱田, 2004; 柴山・新井, 2004; 他), そして「知性・品格」(坂東, 2006)が考えられる。梶田(1988)が, 男女の自己評価には顕著な差が見られると述べているように, このような自己を規定する要因に関する研究の多くでは性差がみられている。しかし, これらの性差は男女が同じ質問項目に答えた結果から示されており, この方法では女性の自己評価的意識領域を十分抽出できないと考える。また, これら自己評価の側面は大別して「本人が持つ資源」と「自己評価を高めるために具体化される行動」に分けられるが, これまで資源と行動を分けてとらえた研究はみられない。そこで本研究では, 調査対象者を女性に限定し, 質問項目を女性の評価に強く関わるもので構成する。さらに, 女性の自己評価を規定する要因のなかでも資源に焦点を当て, 「女性の持つ魅力」として定義し, 自己魅力意識を測定する尺度の作成を試みる。また, ここでいう自己魅力意識は, 女性の自己評価が周囲の目によって決定されるという梶田(1988)の見解に従い, 「女性として, 人から期待されている特性」とする。

一方, 自己評価的意識は対人態度との関連が様々な視点から研究されている。例えば赤澤(2006)は, 女性における性役割の自己認知が親密な異性への行動と関連することを明らかにし, 藤島(2005)は, 女性の自己評価の高さが異性選択と関連することを明らかにした。自己肯定感や自尊感情が他者への自己呈示を変化させることを示した研究もある(寺島・小玉, 2007)。以上から自己魅力意識と対人態度が関わると推測され, また相手との関係性や, 状況・場面に応じて関わる自己評価の側面が異なることから, 異性に対する態度では外見的魅力, 性的魅力, 性役割観などが関わり(赤澤, 2006; 浜田・北山, 2006; 山本ら, 1982), 同性に対する態度では外向性や協調性などが関わる(水野, 2007)と考えられる。また, 伊藤(1983)が, 異性に期待される女性の役割に比べて, 社会から期待される女性の役割は男性性が高くなることを示していることから, 社会的な他者関係においても同様に態度が変化すると考えられる。そこで本研究では, 上述した自己魅力意識の側面が同性・異性・社会に対する対人態度を, どのように規定するのかを検討する。

本研究では, まず研究Ⅰにおいて, 現代における「女性に望まれる魅力」がどのようなもの

であるかを明らかにし、女性の自己魅力意識尺度を作成する。次に研究Ⅱでは、自己魅力意識尺度を用い、「望ましいと思われる魅力を自分がどれだけ自分が備えているか」についての自己評価と対人態度との関連を明らかにする。さらに、伊藤（1978）による、当時の女性に望まれていた女性役割概念の研究結果と比較し、女性に望まれる特性の変化についても検討していきたい。

自己魅力意識尺度の作成（研究Ⅰ）

目 的

「同性（異性／社会一般）から見て、望ましいと思う女性の魅力」という視点から、女性の魅力意識を測定する尺度を作成すること目的とする。

方 法

調査対象者 私立大学の学生 127 名（女性 82 名、男性 45 名、平均年齢 18.89 歳、SD0.97）を対象とした。

調査方法と時期 2008 年 10 月、授業時に集団法にて調査を実施した。

調査内容 項目収集のため行った予備調査は、大学生・社会人男女 20 名を対象にした。選定した自己魅力意識 43 項目について、「女性（男性／社会一般）の目から見て、女性が次のような項目内容を備えていることはどの程度望ましいと思いますか。あなた個人ではなく、あくまでも女性（男性／社会一般）から見てという点に留意してお答えください」と教示し、女性／男性／社会一般の 3 つの側面について評定を求めた。評定方法は「非常に望ましい」「やや望ましい」「望ましいこともある」「望ましいとは限らない」「望ましくない」の 5 件法で、各々 5～1 点が配されている。呈示順序は対象、項目ともにカウンターバランスをとった。

結果と考察

自己魅力意識 43 項目について、概念別の 3 側面ごとに因子分析（主因子解、promax 回転）を行った。その結果、「同性に望ましいと思われる魅力」と「異性に望ましいと思われる魅力」の因子構造がほぼ同様であったため、両概念をこみにして再度因子分析（主因子解、promax 回転）を行った¹⁾。まとまりの良さから 5 因子解を採用し、負荷量が .40 に満たない項目、および複数の因子にまたがる 6 項目を削除した。最終的な因子分析結果を Table1 に示す。第 1 因子は見た目に関するものであったため、「外見」と名付けた。第 2 因子は人と人が交流する場面で望ましいとされるものであったため、「社交性」と名付けた。第 3 因子はこれまで伝統的に女性に期待されてきた内容で構成されていたため、「淑やかさ」と名付けた。第 4 因子は性的な事柄に関する魅力がまとまったため、「性的魅力」と名付けた。第 5 因子は知性や強さに関するものであったため、「自立・自律」と名付けた。各下位尺度の α 係数は .70～.88 で、

内的整合性は高いといえる。

Table1 異性・同性が望ましいと思う女性の魅力因子分析結果 (主因子解, promax 回転)

| 項 目 | I | II | III | IV | V | 共通性 |
|-----------------|----------------------|-----------------------|------------------------|------------------------|-------------------------|-----|
| | 外見 $\alpha = .88$ | 社交性 $\alpha = .80$ | 淑やかさ $\alpha = .81$ | 性的魅力 $\alpha = .73$ | 自立・自律 $\alpha = .70$ | |
| 顔立ちが整っている | .81 | -.04 | .10 | .06 | -.08 | .72 |
| スタイルが良い | .78 | .04 | -.01 | .07 | -.05 | .65 |
| 服のセンスが良い | .72 | .14 | -.13 | -.14 | .24 | .69 |
| 肌がきれい | .72 | .15 | -.01 | .00 | .02 | .65 |
| 目がパッチリとしている | .72 | -.03 | .13 | .08 | -.13 | .58 |
| 足がきれい | .65 | -.14 | .25 | .06 | -.14 | .53 |
| おしゃれがうまい | .62 | .23 | -.13 | -.09 | .16 | .56 |
| 髪がきれい | .59 | .09 | .17 | -.03 | .06 | .55 |
| 胸が大きい | .55 | .08 | .06 | .26 | -.16 | .51 |
| 女らしい身体つきをしている | .48 | -.04 | .13 | .30 | -.02 | .50 |
| 華がある | .47 | -.06 | .32 | .09 | .10 | .52 |
| にこやかな印象を受ける | .01 | .74 | -.05 | .17 | .06 | .61 |
| 聞き上手な | .01 | .68 | .02 | -.03 | -.08 | .44 |
| 明るい | .12 | .60 | -.07 | .08 | .03 | .45 |
| 場の雰囲気をよくする事が出来る | .01 | .59 | -.06 | .05 | .24 | .51 |
| 相手の立場に立って考えられる | -.04 | .56 | .17 | -.09 | .08 | .44 |
| 外向的な | .15 | .53 | .03 | -.08 | .03 | .40 |
| 気遣いが出来る | .04 | .47 | .37 | -.14 | -.13 | .45 |
| 責任感がある | -.09 | .46 | .12 | -.03 | .31 | .45 |
| 社交的な | .21 | .42 | -.06 | .02 | .24 | .44 |
| 清楚である | .09 | -.01 | .66 | -.01 | .17 | .59 |
| 品格がある | .10 | -.10 | .63 | .07 | .29 | .61 |
| 落ち着きがある | .01 | -.04 | .58 | -.11 | .31 | .49 |
| 立ち居振る舞いが美しい | .18 | -.02 | .53 | -.04 | .25 | .53 |
| 上品である | .22 | .09 | .53 | -.18 | .03 | .46 |
| 守ってあげたくなる | -.08 | .16 | .47 | .34 | -.35 | .50 |
| 母性がある | .06 | .15 | .45 | .14 | .05 | .39 |
| セックスアピールがある | .03 | -.04 | -.07 | .71 | .11 | .48 |
| 異性をその気にさせる | .16 | -.12 | -.16 | .69 | .14 | .52 |
| 異性に性的対象として見られる | .04 | .02 | -.07 | .69 | .01 | .48 |
| 甘え上手な | -.01 | .13 | .15 | .57 | -.09 | .44 |
| 色気がある | .39 | -.01 | .04 | .44 | .14 | .55 |
| 女性としての強さがある | .04 | .01 | -.01 | .02 | .68 | .48 |
| 自分の意思を主張できる | -.16 | .11 | .24 | .03 | .60 | .49 |
| 頭の回転が速い | .06 | .01 | .19 | .02 | .59 | .49 |
| 感情表現が豊かな | -.16 | .21 | .16 | .14 | .47 | .37 |
| 自分をコントロールする | -.06 | .25 | .21 | .03 | .42 | .41 |
| 因子間相関 | | | | | | |
| Factor1 | — | .45 | .44 | .42 | .35 | |
| Factor2 | | — | .42 | .15 | .43 | |
| Factor3 | | | — | .25 | .25 | |
| Factor4 | | | | — | -.11 | |
| Factor5 | | | | | — | |

自己魅力意識と対人態度との関連（研究Ⅱ）

目 的

研究Ⅰで作成した「女性における自己魅力尺度」を用い、女性の自己魅力評価が、「同性（異性／社会一般）に対する態度」と、どの様に関わるのかを検討することを目的とする。なお、自己魅力評価の違いに、個人の経験差（交際経験、就職活動・アルバイトなど）が関わっているのかも検討する。

方 法

調査対象者 私立大学3校の女子学生264名（平均年齢20.83歳，SD1.48）を対象とした。

調査方法と時期 2008年11月から12月にかけて授業時に調査を実施した。質問紙は一斉に配布し、その場ですべて回収した。

調査内容 自己魅力意識：研究Ⅰで作成された「女性に望まれる魅力」を内容とした尺度を用い、「次のような特性を、どれだけ備えていると思うか」を尋ね、評定を求めた。評定方法は、分布が「そうではない」に偏ることが考えられたため、評定基準を操作し²⁾、「そうだ」「ややそうだ」「どちらとも言えない」「ややそうではない」「そうではない」「全くそうではない」の6件法で、おのおの6～1点が配されている。項目数は37項目であった。

表出スキル行使：対人態度の指標として、本研究では、「相手に対して、どれだけ積極的に行動に表すことができるか」を測定することを目的としたため、石井（2007）の社会的スキル行使尺度の中から、表出因子（6項目）を用いることにした（例：自分の感情や気持ちを素直に表現する）。それぞれ同性・異性・社会場面での相手を想定し、「同性（異性／アルバイトなどの社会的場面における上司や先輩）と知り合って間もないころ、次のような行動はどの程度当てはまるか」を3パターンで尋ね、評定を求めた。「当てはまる」～「当てはまらない」の5件法で、おのおの5～1点が配されている。

外向性：対人態度に関わる要因としてパーソナリティ特性が考えられたため、本研究では、Bigfive（和田，1996）の下位尺度である外向性を、対人態度に対する統制変数として加えることにした。評定方法は、「非常に当てはまる」～「全く当てはまらない」の7件法で、おのおの7～1点が配されている。項目数は12項目であった。

フェイスシート：「現在、交際している人の有無」「これまでに、交際していた人の有無」「就職活動経験の有無」「アルバイト経験の有無」を尋ねた。

結 果

1. 尺度の検討

自己魅力意識：自己魅力意識尺度について、研究Ⅰと教示が異なるため、再度因子分析（主因子法，promax）を行ったところ、研究Ⅰで得られた因子構造と大きく異なった結果が得ら

れた。これは、研究Ⅰでは「女性がその特性を持っていることがどれだけ望ましいか (女性役割期待)」と尋ねたのに対し、研究Ⅱでは「その特性を調査対象者が備えていると思うか (自己評価)」という尋ね方であったためと考えられる。そこで、研究Ⅰの因子構造と同じ項目で、内的整合性を確認するため下位尺度ごとに主成分分析を行った³⁾。その結果、各下位尺度について .40 以下の項目がなかったため次元であると判断し、項目はそのままでの分析を行うことにした。α 係数は .84 ~ .88 であり、十分な信頼性が得られたと言える。

表出スキル行使：次に、表出スキル行使尺度の内的整合性を確認するため、主成分分析を行った。対象が3場面であったものの、それぞれの主成分分析結果から次元であることが認められた。α 係数は .79 ~ .87 で、十分な信頼性が得られたと言える。

外向性：次に、外向性の内的整合性を確認するため、主成分分析を行った。結果、次元であることが認められた。α 係数は .91 と十分に高い信頼性が得られた。

なお、以下では各下位尺度の単純加算値を項目数で除したものを尺度得点として用いた。

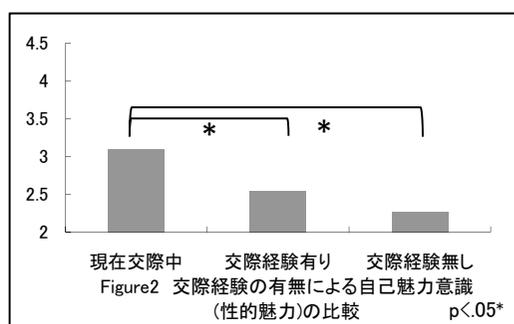
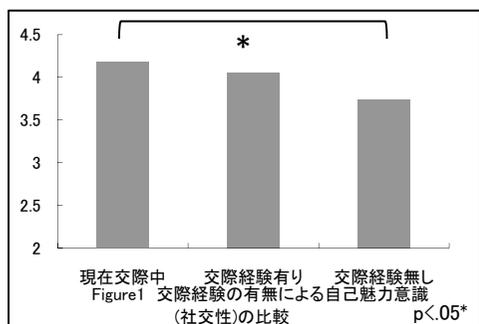
2. 要因による自己魅力意識の下位尺度および表出スキルの検討

交際経験による検討：交際経験の有無について、「現在、交際している人がいる」「過去、交際していた人がいた」「今まで、交際した人がいない」の3群で差がみられるか分散分析を行った。結果を Table2 に示す。交際経験の有無で自己魅力意識の「社交性」と「性的魅力」に有

Table2 交際経験の有無による尺度得点の差

| | 現在交際中(n=106) | | 交際経験有り(n=111) | | 交際経験無し(n=44) | | F | |
|---------|--------------|------|---------------|------|--------------|------|------|----------|
| | 平均 | SD | 平均 | SD | 平均 | SD | | |
| 自己魅力意識 | 外見 | 3.07 | 1.03 | 2.89 | 0.87 | 2.77 | 0.91 | 2.97 |
| | 社交性 | 4.18 | 1.09 | 4.06 | 0.94 | 3.74 | 0.85 | 3.34* |
| | 淑やかさ | 3.29 | 1.04 | 3.15 | 0.94 | 2.99 | 0.99 | 1.20 |
| | 性的魅力 | 3.09 | 1.31 | 2.55 | 1.00 | 2.26 | 1.00 | 12.69*** |
| | 自立・自律 | 4.00 | 0.98 | 3.88 | 0.92 | 3.71 | 0.97 | 2.31 |
| 表出スキル行使 | 同性 | 2.79 | 0.93 | 2.84 | 0.80 | 2.71 | 0.83 | 0.29 |
| | 異性 | 2.27 | 0.81 | 2.23 | 0.75 | 2.19 | 0.73 | 0.09 |
| | 社会 | 2.59 | 0.99 | 2.43 | 0.91 | 2.31 | 0.89 | 1.91 |

*p<.05 ***p<.001



意差がみられたため、多重比較 (Tukey 法) を行った。結果を Figure1, Figure2 にそれぞれ示す。現在交際中と回答した群は、交際経験がないと回答した群よりも「社交性」を高く評価し、また、過去に交際経験がある群、交際経験なし群の両群よりも、「性的魅力」を高く評価していた。なお、表出スキル行使には群間差はみられなかった。

アルバイト・就職活動経験による検討：アルバイト経験・就職活動経験の有無について同様に t 検定を行った。その結果、自己魅力意識ではいずれの経験による差もみられなかった。また、表出スキル行使も同様に差がみられなかった。

3. 表出スキル行使に及ぼす自己魅力意識の影響

自己魅力意識が表出スキルに及ぼす影響について検討するため、自己魅力意識の下位尺度を説明変数とし、状況ごとの表出スキルを基準変数とする重回帰分析 (強制投入法) を行った。なお、統制変数として外向性を投入した。下位尺度間の相関を Table3 に、重回帰分析の結果を Table4 に示す。数値は有意なもののみを記載した。同性に対する表出スキルは、自己魅力意識における「社交性」「性的魅力」によって規定され、異性に対する表出スキルは、「性的魅力」「自立・自律」によって規定され、社会場面での上司や先輩に対する表出スキルは、自己魅力意識では規定されないことが示された。

Table3 自己魅力意識・外向性と表出スキル行使の関連

| | 自己魅力意識 | | | | | 表出スキル行使 | | | 外向性 | |
|---------|--------|-----|--------|--------|--------|---------|--------|--------|-------|-------|
| | 外見 | 社交性 | 淑やかさ | 性的魅力 | 自立・自律 | 同性 | 異性 | 社会 | | |
| 自己魅力意識 | 外見 | — | .58*** | .69*** | .74*** | .56*** | .20** | .39*** | .13* | .06 |
| | 社交性 | — | — | .51*** | .47*** | .74*** | .33*** | .31*** | .06 | .17** |
| | 淑やかさ | — | — | — | .57*** | .50*** | .16** | .29*** | .15* | .06 |
| | 性的魅力 | — | — | — | — | .49*** | .26*** | .40*** | .16** | .10 |
| | 自立・自律 | — | — | — | — | — | .30*** | .39*** | .12 | .09 |
| 表出スキル行使 | 同性 | — | — | — | — | — | .53*** | .35*** | — | .18** |
| | 異性 | — | — | — | — | — | — | .44*** | — | .17** |
| | 社会 | — | — | — | — | — | — | — | — | .18** |
| | 外向性 | — | — | — | — | — | — | — | — | — |

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table4 表出スキル行使を基準変数にした重回帰分析結果

| | 表出スキル | | |
|--------|--------|--------|-------|
| | 同性 | 異性 | 社会 |
| 外向性 | .24* | .31* | .32** |
| 自己魅力意識 | | | |
| 外見 | — | — | — |
| 社交性 | .20* | — | — |
| 淑やかさ | — | — | — |
| 性的魅力 | .18** | .16* | — |
| 自立・自律 | — | .27** | — |
| R^2 | .16*** | .23*** | .06** |

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

考 察

1. 女性役割期待における現代女性と先行研究との比較

本研究の研究 I において収集された項目から、現代女性への役割期待が明らかとなった。そこで伊藤（1978）の M-H-Fscale を参考に、時代による女性役割期待の比較検討を試みる。まず、M-H-Fscale の Femininity（女性性）、Humanity（人間性）に属する項目が、同じ、もしくは類似性の高い項目として本研究の「女性に望まれる魅力」としてあげられた。伊藤（1978）は、女性役割を包括的にとらえるためには Humanity も導入する必要があると述べており、本研究で女性の魅力として収集されたのも当然であると考えられる。しかし、M-H-Fscale では Masculinity（男性性）に属している項目も本研究の女性に望まれる魅力として選定されたことに加え、Femininity の「献身的な」「従順な」「静かな」は、同じ項目としては挙がってこないという違いも見られた。特に「静かな」に関しては、むしろ対義語でもある「活発な」「元気がある」などが項目選定段階で収集されており、現代では、明朗快活さが望ましい女性の魅力としてとらえられていると考えられる。

以上のように、従来とは反対の概念に属する語の収集や Masculinity に属する項目が収集されたことは、女性に望まれる役割期待の変化を示唆するものに他ならない。しかし、一方で、自己魅力意識に「淑やかさ」という従来の女性性に属する側面が抽出されたことは重要である。すなわち、現代の女性には従来の女性役割、人間役割に加え、社会に貢献する一員としての男性役割も同様に期待されるようになったと考えられる。以上のことから、女性に対して望まれる役割期待は変化しており、他方、女性は他者評価が自己評価に結びつきやすいことから（梶田，1988）、女性自身の自己評価を規定する側面も変化していると考えられる。

2. 自己魅力に関わる交際経験の有無

交際経験の有無が女性の自己魅力意識にどのように関わるかをみたと、現在交際中の者は交際経験がない者に比べて「社交性」を高く評価しており、交際経験の有無が「聞き上手な」「明るい」などの「社交性」と関連するという興味深い結果が得られた。また、「性的魅力」は、過去に交際経験があった者、交際経験のない者より現在交際中の者で評価が高く、交際経験の有無に加え、現在の恋人の有無が魅力意識の自己評価に大きく関わっていることが示された。高坂（2009）によれば、異性と付き合うと第三者からの評価が上昇しているように感じ、また、女性は異性と付き合うことで安心感や幸せといったポジティブな感情を持つという。現在恋人がいることに付随する充足感や他者からの評価の上昇が女性の自信へと繋がり、自己評価を上昇させるのだと言えよう。

3. 態度に及ぼす自己魅力の影響

本研究では最後に、自己魅力意識が、同性・異性・社会的な場面のそれぞれにおける積極的

な対人態度にどのように影響しているかを明らかにすることを目的とした。その結果、「社交性」と「性的魅力」を高く評価した者は同性に対して、「性的魅力」と「自立・自律」を高く評価した者は異性に対して積極的な態度を示す傾向にあった。本研究の「社交性」は、協調性と外向性に類似した項目で構成されており、一方、表出スキルの項目は積極的な自己主張などで構成されている。水野（2007）は、社会的スキルの因子である自己主張には外向性が関わり協調性は負の相関を示すと述べているが、本研究の結果から、女性の同性に対する積極的な態度には、場の雰囲気を良好にしようと働きかける協調性と、積極的にコミュニケーションを図ろうとする外向性の二つの面が相互に関連している可能性が示唆された。女性は従来から関係指向的であるとされ、人間関係を重要視するといわれており（Wagner & Wagner, 2000）、良好な対人関係の形成には自己主張は関連しないと水野（2007）はいう。そのため、「社交性」が同性に対する自己主張や積極的な態度に影響しているという本研究の結果が、現代女性が関係指向的ではなくなってきたことを示唆しているのか、それとも同性との良好な対人関係という概念がお互いに自己主張ができる関係だととらえる傾向にあるのかについては、今後も検討が必要であろう。一方、自己の「性的魅力」を高く評価している者は同性にも異性にも積極的な態度を示していた。異性に対するこの結果は、浜田・北山（2006）の性へのネガティブな態度が対人積極性の低さと関連するという結果と通底しており、「性的魅力」が異性への積極的な態度を促すものといえる。しかし、「性的魅力」と同性への積極的な態度との関連はこれまでに報告されていない。上述したように、「性的魅力」の自己評価には恋人の有無、交際経験の有無が女性の自信として影響していることが考えられ、また梶田（1988）は、自信や誇りを持っていれば他者に積極的に振舞うことができると述べていることから、現在恋人がいることで生じる自信が、異性はもちろん、同性に対する積極的な態度にも波及すると推測される。これまでの研究では（山本ら、1982）、性的魅力は女性よりも男性の自己評価を規定する上で重要な要因とされてきたが、女性に特化した内容であれば、現代女性においても重要であることが本研究で示唆された。最後に、「自立・自律」を高く評価する者が異性へ積極的な態度を示していた結果については、女性の社会進出や男女平等に抵抗がなくなった現在、男性も「自立・自律」を備えた女性を望ましいとし（内閣府、2007）、他者評価を自己評価に取り入れがちな女性も、それらを望ましい側面であると評価していることが考えられる。

以上のように、本研究では、女性の自己評価を規定する要因の変化を自己魅力意識と表出スキルとの関連から述べてきた。なかでも「性的魅力」が女性の自己呈示において重要な要素であると示唆されたこと、またその「性的魅力」の自己評価には、恋人の有無、交際経験の有無が関わるということが示されたことは、今後、女性を対象とした研究において重要であるといえる。また、本研究で作成した自己魅力意識尺度からは、望まれる女性像が従来と比べて変化していることが示唆された。向井（2007）も性役割認知が従来と比べ変化してきていると述べており、今後、女性を対象とした研究では、その点を考慮すべきだといえよう。

4. 問題点と今後の課題

本研究では、調査対象が女子学生のみだったため、必ずしも社会人女性を包括した自己魅力意識尺度とはなりえていない。研究Ⅰで「社会からみた女性に望まれる魅力」の側面を以降の分析から省いてしまったため、結果として研究Ⅱの社会一般の場面では、いずれの因子も有意な説明変数にはならなかった。これは社会場面で期待される特性が、異性・同性間で期待される特性と異なる事を示唆するものであり、今後は社会一般の場面を就職活動の場といった、より社会人として求められる環境に近い場面に限定すると共に、より包括的な尺度の開発が必要だろう。さらに、「性的魅力」が女性の自信につながり、異性或同性への積極的な態度に波及している可能性が見られたことから、自己魅力意識と自尊感情との関連、および、自己魅力意識の妥当性の検討を今後の課題としてあげておきたい。

注

- 1) 「社会から見て望ましいと思われる魅力」は、最もまとまりがよかった因子数や抽出された因子の内容が、「異性に望ましいと思われる魅力」「同性に望ましいと思われる魅力」とは明らかに異なっていたため、以降の自己魅力意識尺度は「異性に望ましいと思われる魅力」「同性に望ましいと思われる魅力」から得られた側面を用いることとした。
- 2) 回答の分布が「そうではない」の方向に偏る事が考えられたため、1段階ネガティブな方向に選択肢を移行させた。
- 3) 自己魅力意識尺度は、研究Ⅰと研究Ⅱで同じ質問項目だが教示が異なり、前者が女性役割期待への評価であるのに対し、後者はその自己評価である。そのため、研究Ⅰと研究Ⅱの因子分析結果が大きく異なると思われる。しかし、本研究では、あくまで期待される特性をどれだけ備えているかの自己評価を求めるため、ここでは研究Ⅰの因子構造を採用することにした。

引用文献

- 赤澤淳子 2006 青年期後期における恋愛行動の規定因について—関係進展度、恋愛意識、性別役割の自己認知が恋愛行動の遂行度に及ぼす影響— 仁愛大学研究紀要, 5, 17 - 31.
- 馬場安希・菅原健介 2000 女子青年における瘦身願望について 教育心理学研究, 48, 267 - 274.
- 坂東真理子 2006 女性の品格—装いから生き方まで— PHP 新書 PHP 研究所
- 藤島喜嗣 2005 異性の対人魅力に対する社会的望ましさと類似性の効果—調整要因としての関係期間— 學苑, 772, 11 - 20.
- 浜田恵・北山修 2006 大学生における性に対するネガティブな態度に関する研究—自己・他者への意識との関係から— 九州大学心理学研究, 7, 147 - 157.
- 菱田陽子 2004 現代青年の自己受容に関する分析 (2) —やさしさを中心とした性差の検討— 北陸学院短期大学紀要, 35, 195 - 211.
- 石井佑可子 2007 「メタ・ソーシャルスキル」測定尺度作成の試み 京都大学大学院教育学研究科紀要, 53, 286-298.
- 伊藤裕子 1978 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, 26, 1-11.
- 伊藤裕子 1983 青年期における性役割観および性役割期待の認知 教育心理学研究, 31, 146 - 151.
- 伊藤裕子 2006 思春期の身体と性—瘦身願望をめぐって—伊藤裕子(編) ジェンダー・アイデンティ

- ティー揺らぐ女性像— 至文堂, Pp.42 - 54.
- 梶田叡一 1988 自己意識の心理学 [第2版] 東京大学出版会.
- 水野邦夫 2007 どの社会的スキルが良好な対人関係の形成・維持に関連するか 聖泉論叢, 14, 53 - 59.
- 向井心一 2007 現代の青年期における性役割認知と過去の青年期における性役割認知の比較 臨床教育心理学研究, 33.
- 内閣府男女共同参画局 2007 女性が職業を持つことについての考え.
- 内閣府男女共同参画局 2008 固定的性別役割分担意識報告.
- 日本性教育協会 2005 青少年の性行動全国調査.
- 柴山直・新井真由美 2004 青年期における性役割観と自尊心との関連 —両親の養育態度への認識内容からの検討— 新潟大学教育人間科学部紀要, 7, 15 - 27.
- 総務省 総計局・政策統括官(統計基準担当)・統計研修所 2000 平成12年国勢調査 配偶関係.
- 高坂康雅 2009 恋愛関係が大学生に及ぼす影響と、交際期間、関係認知との関連パーソナリティ研究, 17, 2, 144-156.
- 寺島瞳・小玉正博 2007 他者を操作することに影響を及ぼす個人内要因の検討 パーソナリティ研究, 15, 313 - 322.
- 和田さゆり 1996 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, 67, 61 - 67.
- Wagner, A. Wagner, D. 諸永好孝(訳) 2000 よりよい人間関係とコミュニケーションスキル— TA+NLP— 株式会社チーム医療
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64 - 68.

(2009.10.7 受稿, 2009.11.27 受理)